

京都大学	博士(文学)	氏名	佐々木 祐
論文題目	先住民集団の「発見」：十九―二十世紀ニカラグアにおける エスニシティ編成に関する歴史民族誌		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、中央アメリカ・ニカラグア共和国における先住民集団の歴史的編成メカニズムを考察したものである。統一した集団アイデンティティを共有しなかった諸集団が、国民化や労働者化を目的とする国家の諸政策・諸制度との複雑な交渉を経て、次第に国民国家の内的な残余としての「先住民」意識を獲得してゆく過程を、フィールドワークや現地資料の読解および法制度変遷の分析を通じて明らかにする。</p> <p>序論では、社会科学におけるエスニシティ論を概観しながら、現代に至る社会構成のなかでの「先住民」の問題を論じた。注目した課題は次の三点である。第一に、歴史記述における自律的な主体として先住民を描くこと。第二に、先住民をめぐる自称と他称の相互規定プロセスを分析すること。第三に、法や制度との緊密な関りにおいて生成してきたものとして先住民をとらえ直すこと。先住民の動的な集団編成を分析するなかで、こうした課題を解決することが本論文の目的となる。</p> <p>第一章では、上述した作業を進めるために「共同体」を理論的に規定した。とりわけ周縁社会における人々の生活の根拠であるとともに、統治の装置としても機能するものとして、先住民共同体はある。そうした事象の分析のためには、現場における接触と交渉に注目することが必要となる。さらにその共同体編成を、法制度や経済開発といった諸契機と関連づけて分析することが重要である。この方向に則り、周縁社会における共同性とアイデンティティ生成の過程を分析するための方法を設定した。</p> <p>第二章では、上の理論的な枠組みを具体的に適応する際の背景について分析した。スペイン植民地政体を引き継いだニカラグア国家のもとにある太平洋岸部社会と、英国の覇権のもとで編成された大西洋岸部社会という、併存する二つのシステムの歴史的配置を考察した。さらに、こうした分断にも関わらず、両者の間にはヒト・モノのインフォーマルな交通が存在してきたことを示した。この移動と接触の場のなかに、本論で扱う先住民社会は置かれ、またそうした開放的な特質が共同体の編成に強い影響を与えてゆくのである。</p> <p>第三章では、現在のニカラグア社会における先住民共同体編成の直接的な契機となった歴史的な事象を分析した。統治の周縁部における交易を通じ、ゆるやかな関係性を保ちつつ生活してきた諸先住民集団は、19世紀中葉以降の国家的な農業開発事業において、労働力および農地の供給源とみなされてゆく。この急速な社会変化により、共同的な自意識を持たない複数の民族集団が一元的に「先住民」として規定された。そうした外的な規定を引き受ける形で、1881年にマタガルパ地方諸先住民集団は連携して</p>			

武装蜂起を行なった。政府との交渉の際に書かれた先住民側の書簡の分析により、ここでは「先住民」という名付けと名乗りのメカニズムを明かにし、またそこに潜む先住民社会内部の齟齬をも焦点化した。

第四章では、上述した叛乱の鎮圧にあたった戦争省大臣の書簡を対象に、統治の視点からの先住民規定を分析した。先住民社会の構造に無関心であった旧来の施策とは異なり、鎮圧作戦を効果的に遂行するための観察がそこで試みられ、一方的な殲滅・外化ではなく、その社会構造に応じた介入の方策が探られた。その際、先住民社会内部の齟齬を利用し、土地と人員を管理する統治代行機関としての「先住民共同体」を再設定することが構想される。こうした方策は、先住民社会を制度内部に位置づけると同時に、現場での利害関心に規定された新たな法を措定する作業でもあったことを指摘した。これ以降先住民は、国民化を目的とする法制度との密接な連関のもとにおかれてゆく。

第五章では、こうして設定された法システムが、どのように執行され、また再帰的に新たな法措定をひきおこしたのかを分析した。19世紀末から20世紀初頭にかけての先住民関連史料を対象として、暫定的な統治装置だったはずの「先住民共同体」が、法制度の不備・矛盾や意図的・無意識的な流用によって次第に永続的な組織として確定されていった事実を明かにした。国家による統治の企図から逸脱すると同時に、一方では先住民の即自的な生活形態とも異なるものとして「先住民共同体」は現在に至るまで存続することになる。

第六章では、ニカラグア国家の実行支配領域の拡大に伴う先住民政策の変化を考察した。1894年の大西洋岸部「再併合」を頂点として進展した同地域への介入政策において、そこで発見された諸民族集団は、これまでの経験では解釈できない存在として措定された。英米の政治経済的利害と結びついて展開したこの接触の過程で、「われわれ」とは異なる他者像が次第に構築されていったのである。また、統治の挫折と妥協のなかで大西洋岸部は「別のニカラグア」として切断されることになる。こうして極めて政治的に構成された自己・他者の断絶の内部に、これまで論じてきた先住民が位置付けられていくメカニズムを分析した。

終章では、こうした自称（名乗）・他称（名付け）の相互作用と、集団規定の流用と再措定の複雑な過程において編成される「先住民」という存在について総合的に考察を行なった。それはまず、複数の当事者の位置と、場当たりに設定される法制度とによって産出された「先住民共同体」によって担保された。またそれは、政治的な領域確定に伴う「われわれ」の策定行為と表裏一体のものでもあった。このような複雑な交渉過程に巻き込まれる「主体」として、先住民は生成されてきたわけである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、19世紀から20世紀にかけてニカラグアの先住民によって形成された共同体の生成と変容の過程を、ニカラグア現地における調査活動を通じて収集した資料の分析に基づき、考察を加えたものです。

本研究の意義としてまず取り上げるべきは、本論文が、欧米の研究者も含めてこれまで十分な研究がなされてきたとはいいがたいニカラグアの社会を対象に、現地での綿密な調査と資料収集によってまとめられたという点です。19世紀後半に独立国となりながらもごく最近に至るまで安定した政治体制が構築されることのなかったニカラグアは、資料収集という点でもきわめて困難をかかえる社会として知られています。佐々木さんは、合計6回にわたってニカラグア現地に赴き、ニカラグア国会図書館、国立公文書館、セントロアメリカ大学・中米ニカラグア歴史研究所、セントロアメリカ大学・大西洋岸文書研究センター、レオン教区歴史文書館などでの資料収集とそれに基づく分析を通じて、19世紀から20世紀に至る先住民の多様な運動と、統治権力との関係性のなかで生成していく彼らの共同性、共同体形成のプロセスを、本論文を通じて明らかにしています。特に、ニカラグアにおける先住民に光をあてた研究は、国際的にも数件を数えるのみであり、その意味でも、本論文がもつ学術的貢献はきわめて高いと判断できます。

本論文は、以下のように構成されています。まず、序論では、従来の社会学におけるエスニシティ論をふまえつつ「先住民」の位置づけを整理し、さらに、第1章では、社会学における「共同体」論のまとめがおこなわれるとともに、本論文の位置づけがなされています。第2章では、先住民アイデンティティが未成熟な段階でのニカラグアにおける住民の空間的な配置と太平洋岸と大西洋岸の住民間の移動や交通が論じられ、続く第3章では、国民国家形成過程における政府による「先住民」規定（「先住民」という「名付け」）の過程が、先住民集団の抵抗の中での自己規定＝「名乗り」とのかかわりあいのなかで分析されていきます。以上をふまえた上で、本論文の柱となる第4章、第5章、6章では、統治者側の先住民という規定＝名付けのプロセスが、先住民の抵抗を鎮圧した側の視点から考察されるとともに、法制度の不備・矛盾や現場での対立・葛藤などを通じて、国家の統治意図とも、また、先住民の生活実態とも齟齬をきたしたままで、「先住民共同体」が一定の枠付けのなかで「永続性」をもって組織されていく様相が生き生きと論じられます。こうした考察の上に、終章では、自称／他称の相互の入れ子状況のなかで産出された先住民共同体という問題が、理論的に整理されています。

以上のような内容をもつ本論文は、社会学の研究および社会学理論の発展という点で多くの新たな視座を提供しています。なかでも、先住民研究というこれまで研究がほとんどなかった分野を対象に、それをエスニシティ論の文脈から再定義したことは本論文の大きな意義です。

佐々木さんは、これまでの社会学、社会科学分野におけるエスニシティ論を整理した上で、先住民を、何よりもまず自律的主体として、同時に、自称（名乗り）と他称（名付け）の相互プロセスのなかで立ち現れるものとして、さらに、法や制度の緊密な関わりのなかで生成したものとして位置づけています。この先住民の再定義は、従来の先住民を実態としてとらえる視座はもとより、近年の構築された存在としての先住民といった視点をも超えて、新たな観点を提示することに成功しています。

さらに、こうしたダイナミックな本論文の視座は、共同性ないし共同体をめぐる社会学理論の構築という点でも、新たな問題提起をしています。

人間の関係性の考察を主たる課題としてきた社会学にとって、共同性ないし共同体というテーマは避けて通れない最重要課題のひとつであることはいうまでもありません。従来、人間の共同性ないし共同体は、内発的な形で、情緒性や感情的絆の形成を通じて成立するとされてきました。本論文は、これまでのこうした素朴な共同性／共同体の成立についての議論を超えて、先住民の共同体が、政治的な統治権力とそれへの抵抗／対抗を通じた多様な力関係の交錯のなかで生成／変容するという動的プロセスのなかでとらえようとしています。先住民の抵抗運動とそれに対応する統治権力の法的規制や、両者間の経済的なとりひきを通じて、それまで不在であった先住民の共同性／共同体が関係性のなかでたち現れ、多様な力関係を通じて生成／変容していくありさまを鮮やかに論じた点は、これまでの共同性／共同体生成の理論枠組みを塗り替えるような成果だと思います。

このように社会学研究の上で多くの新たな視点を提示しえた本研究ですが、全体を通して見たとき、若干の不満が残るのも事実です。先住民共同体のダイナミックな生成と変容過程という大きな社会学的テーマを設定しつつも、それが理論的な成果として十分な成熟をみせているかといえ、やや論理構成において不十分な点がみられること、また分析の裏付けのためのデータが必ずしも十全に整っていないことから来る説明不足などが散見されるといった問題点がみられるからです。しかし、本論文が、こうした限界をもちつつも、独自の視座からニカラグア先住民共同体の生成と変容プロセスを描いた優れた論文であることもまた明らかです。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められます。2011年8月11日、審査員3名が論文内容とそれに関連した事柄についての口頭試問を行った結果、合格と認めました。